



中年期の時間的展望と死に対する意識の関連 : 時間 的態度による年代別の検討

日瀧, 淳子

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 4(2):123-128

(Issue Date)

2011-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002990>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002990>



中年期の時間的展望と死に対する意識の関連 —時間的態度による年代別の検討—

The relationship between the time perspective and the consciousness of death in middle ages

日潟 淳子*

Atsuko HIGATA *

要約: 中年期には死の気づきが精神的な葛藤を生じさせる一方で、時間の尊さへの新たな感謝の意識ももたらすという発達の両面的な刺激となるとされる。そのため、死に対する意識は中年期における時間的態度と関連することが示唆される。したがって、本研究では中年期における時間的態度と死生観との関連を年代別に検討した。その結果、40歳代では死後の世界を信じることや寿命を運命として受け入れることと過去の自己の受け入れが関連した。また、死と向き合うことが現在や未来へのポジティブな態度と関連することが示された。50歳代においては、過去に対して後悔やとらわれを抱くことと死への恐怖・不安、死からの回避が正の相関を示し、死に向き合うことにより過去への固執が低減される可能性が示唆された。60歳代では、現在に対する空虚感と未来に対する不安感や消化という態度が死に対する回避的な意識と関連した。死の恐怖に苛まれたり、死ぬことを人生からの解放としないために、現在に人生の蓄積感を得ながら、自分磨きというような自己の内面にむけた生への取り組みを行うことがより必要となる時期であることが示唆された。

キーワード: 時間的展望, 死生観, 中年期

目的

中年期は時間的展望の転換期であり、未来から現在への志向性の変化が生じる(日潟・岡本, 2008; 白井, 1997)。その時期に時間的展望が停滞し、いわゆる中年期危機に陥る者もいる。そのため、中年期は身体的社会的な変化に対応しながら、時間的展望を再度組み立てることが必要となる時期でもある。

成人期以降における死に対する意識は、成人期の初期には、青年期で高まる死に対する心配から幾分解放され、将来の生きる長さに安心し、死に対する恐怖心は薄らぐとされる。その後、死に対する恐怖は、中年期に一度高まり、老年期では人生の回顧をすることによって自我の統合がなされ、激減する(橋本, 2006)。中年期に死にする恐怖が高まる要因については、体力・気力の衰えにより、老いと死を身近に感じ始めたり、親や配偶者などの死別を体験することにより、自己の有限性を自覚することなどがあげられ、自己の有限性の自覚から危機に陥ることもある(岡本, 1985)。

しかし、その一方で中年期には誕生からの時間より生きられる時間としてとらえる時間の認知の変化がみられるようになるが、方向的な反転だけではなく、時間の終わりの気づきにより新たな生に対する意識を生じさせる(Neugarten, 1968)。Neugarten (1968)が実施した面接に対して、ある中年男性は「死を考えるとある程度

の不安はある。しかし、どれほどの喜びがまだ獲得できるのか、どれほどの良い年月をまだ作り出すことができるのか、どれほど多くの新しい活動ができるのか、ということを考えてみるとある種の喜びを感じる。」と述べている。Karp (1988)も50歳代から60歳代の年齢意識の変化をとらえ、死ぬべき運命であることの気づきや時間の有限性が50歳代で顕著になるが、時間が無くなってしまふ資源であると認識することにより、新しいことをはじめる可能性について考え始めるとしている。また、Kubler-Ross (1969)は、死というものがあるおかげで、生に時間的制限が課せられ、与えられた時間の中で何か生産的なことをしなければならぬという気持ちにさせられると述べている。

したがって、中年期の時間的展望と死に対する意識は相互に関連していることが予測される。Colarusso (1998, 1999)は、未来の目標に対する変化については、中年期の中心的な課題である時間の有限性や死を受け入れることが関連し、それにより目標が再定義され、自己を喜ばせてくれる人や物にエネルギーや資源を導くことが可能となると述べている。また、そのような意識が生じることで、さらに時間の有限性と人間の死の気づきに立ち向かうことを可能にするとしている。老年期を対象とした研究では、死の不安が低い者は高い者に比べて人生目標をもち、未来の時間的広がりが大きく、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究員

(2010年9月30日 受付)
(2011年1月7日 受理)

現在に従事する密度が高いことも示されている。死の気づきは精神的な葛藤をもたらすが、時間の尊さへの新たな感謝の意識ももたらすという発達の両面的な刺激となる (Colarusso, 1998)。

また、自己の有限性を意識することは未来に対する意識のみならず、自分の死を意識することで過去の出来事に対する後悔やとらわれが低減されることも考えられる。未来の時間が長く過去につながれていない変化を新たに企画することができる青年期とは異なり、中年期は残された時間で達成することができる変化しか残されない (松浪・熊崎, 2001)。そのような未来に対する狭まりを感じる中で、過去に固執することは精神的健康を損なうものであることが示唆されている (日潟・岡本, 2008)。また、老年期においても過去の出来事に没入することは精神的健康に負の影響を与え、それを過去化して、現在に生きることにより心理的な安定が保たれていくことが示されている (Kastenbaum, 1987)。自己の有限性を自覚することにより、過去の出来事に固執することよりも、残された時間、すなわち、未来の生に対する意識が活性化されることも推測される。自己の死に対する受け入れが過去の固執の低減に関係しているのであれば、そのような援助を行うことによって、葛藤が和らぎ、未来への志向性が生じることも考えられる。

このような先行研究から得られた知見から、本研究では死生観に関連すると考えられる中年期における時間的展望の概念における過去・現在・未来に対する精神的な姿勢や身構えである時間的態度 (都筑, 2007) をとりあげ、死に対する意識との関連を検討する。なお、中年期は時間的展望の転換期にあり、40 歳代、50 歳代、60 歳代では時間的態度の諸相が異なることが示されており (日潟・岡本, 2008)、また、死に対する意識も年代によってかなり異なることが予測されることから、本研究においても年代別の検討を行い、各年代において死への意識がどのように異なり、それらが時間的態度のどのような側面に関連しているのかをとらえ、検討する。

方法

1) 調査対象者、

40 歳代 97 名 (男性 31 名, 女性 66 名, 平均年齢 43.57 歳, *SD* = 2.70), 50 歳代 108 名 (男性 28 名, 女性 80 名, 平均年齢 54.24 歳, *SD* = 2.98), 60 歳代 133 名 (男性 43 名, 女性 90 名, 平均年齢 64.11 歳, *SD* = 2.70)。全体人数 338 名, 全体平均年齢 55.06 歳, *SD* = 8.85 (男性平均年齢 55.39 歳, *SD* = 8.88。女性平均年齢 54.92 歳, *SD* = 8.85)。

2) 調査実施時期

2009 年 9 月

3) 調査手続き

知人等に配布を委託して、主に関東圏と近畿圏に住む 40 歳以上の者に質問紙を入れた封筒を配布し、郵送により回収を行った。質問紙は 490 部を配布し、390 部を回収した (回収率: 79.6%)。そのうち、40 歳から 69 歳以外の者、性別、年齢が不明なもの、および回答がなされていないものを除き、前述の 338 名を分析の対象とした。

4) 質問紙内容

(1) 過去, 現在, 未来への時間的展望: 日潟・岡本 (2008) によって得られた過去, 現在, 未来への時間的態度の各カテゴリについ

ての質問項目 (Table 1) を 5 件法 (「全く当てはまらない」1 点 - 「とても当てはまる」5 点) で実施した。

(2) 死に対する意識: 死生観尺度 (平井・坂口・安部・森川・柏木, 2000) を使用する。下位尺度は、「死後の世界観」(4 項目), 「死への恐怖・不安」(4 項目), 「解放としての死」(4 項目), 「死からの回避」(4 項目), 「人生における目的意識」(4 項目), 「死への関心」(4 項目), 「寿命感」(4 項目) で構成される。そのうち「人生における目的意識」を除く, 24 項目を使用し, 7 件法 (「当てはまらない」1 点 - 「当てはまる」7 点) で回答を求めた。

Table 1 過去, 現在, 未来への時間的態度の質問項目

カテゴリ名	質問項目	
過去の時間的態度	基礎	過去があるから今の自分があると思う。
	必然感	過去の出来事は必然的に起こったと思う。
	自己形成感	過去の出来事によって自分が作られたと思う。
	評価	今まで自分はよくやってきたと思う。
	区切り	過去は過ぎたことなのでしょうがない。
	経験からの学び	過去に経験したことが今の自分に役立っている。
	とらえ直し	嫌な経験も、今から考えるとよかったと思えることもある。
	後悔	今でもずっと後悔している出来事がある。
	とらわれ	今もずっとこだわっている過去のネガティブな体験がある。
	今によって変わる	今を変えることによって過去は変わっていくと思う。
現在の時間的態度	自己理解希求	自分がしたいことがわからない。
	自己理解の気づき	なんとなく自分の好きなことがわかってきた。
	自己確信	今後の方向性は決まっている。
	充実感	今充実していると思う。
	経験の蓄積感	今までの経験がいかにされていると思うときがある。
	到達感	ここまでやっと生きてきたのに、過去の自分にはもどりにたくない。
	必然感	今起こっていることは自分にとって必要なことであると思う。
	未来に向けて	今を一生懸命過ごしたら、未来も開けると思う。
	過去づくり	今を一生懸命過ごすことによって、よりよい過去が作られると思う。
	空虚感	現在物足りなさや、空虚感を感じている。
未来の時間的態度	閉塞感	目の前のことをクリアーすることしか考えてない。
	自分のために	自分のために、現在の時間を使ってもよい。
	チャレンジ	未来の目標に向けて、チャレンジしていきたい。
	期待	未来はよくなっていくと思う。
	自己磨き	自分を磨いていこうと思う。
	現状維持	今の状態を維持できればいい。
	割り切り	未来のことはわからないから、心配してもしようがない。
	自分のために	未来の時間を自分のために使おうと思っている。
	死の準備	どういう風に人生を終えるかを考えて、準備していることがある。
	不安	未来に対して不安を感じることもある。
消化	残りの人生は消化である。	

結果と考察

1) 死に対する意識の年代別の検討 (Table 2)

死に対する意識の年代および性別の検討を行うために、年代と性別を独立変数、死生観尺度 (平井ら, 2000) の下位因子を従属変数として 2 要因の分散分析を行った (Table 2)。年代と性別について交互作用がみられたものはなかった。死生観尺度の「死後の世界観」, 「死への恐怖・不安」, 「死からの回避」に年代による主効果がみられ、多重比較 (Tukey 法) を行ったところ、「死後の世界観」については 40 歳代が 60 歳代よりも高く抱いており、「死への恐怖・不安」については 50 歳代が 60 歳代よりも強く感じていることが示さ

れた。また、「死からの回避」については50歳代が40歳代よりも高い結果となった。「死後の世界観」、「解放としての死」、「寿命観」には性別の主効果がみられ、これら3つの下位尺度に対して女性が男性よりも有意に高い得点を示した。

40歳代では死について考えることを避けるような意識が低いことから、現実的な死への意識が芽生える時期であることがうかがえる。また、40歳代では死後の世界が存在するという意識が高い。死にゆく運命であるということに自覚するが、死後の世界を意識することで、ポジティブに未来を志向できることも考えられる。それに対して、50歳代は死に対する恐怖や不安が60歳代よりも高く、また、死について考えることを回避する傾向も高いことが示された。丹下(2004)の研究においても、成人中期には最も強く死を恐れるが、成人後期においては死に対する恐怖が減少するとともに、次第に死を受容するようになっていく傾向がみられている。残された時間の長さから、50歳代は40歳代よりも死を近くに感じる事が推測され、そのような認識から、死に対する恐怖心や回避傾向がより高まることも推測される。

性別については、男性よりも女性の方が、死後の世界を信じ、死を解放としてとらえる意識や、死ぬことを運命として受容する意識が高いことが示された。田中・後藤・岩本・李・杉・金山・奥田・國次・芳原(2001)によれば、男性は女性よりも死に対してあまり関心を示さないとされ、死後の世界や寿命観などを抱きにくいことも推測される。また、田中ら(2001)や安藤・松井・福岡(2004)の死生観に対する性差の検討において、女性の方が男性よりも死への恐怖や死からの回避の意識が高いことが示されており、死後の世界を信じることや運命として受け入れることによって、死に対する恐怖心を低減しようとする意識が働いていることも考えられる。

Table 2 死生観尺度の年代別、性別の平均値 (SD)と分散分析の結果

死生観尺度の下位尺度名	年代			F値		
	40歳代 n=97	50歳代 n=108	60歳代 n=133	年代	性別	交互作用
	男性=31 女性=66	男性=28 女性=80	男性=43 女性=90	df	df	df
死後の世界観	男性 4.01 (1.89)	3.73 (1.55)	3.15 (1.52)	6.78 **	5.19 *	0.36
	女性 4.34 (1.45)	4.02 (1.21)	3.71 (1.37)			
	全体 4.23 (1.60)	3.95 (1.30)	3.53 (1.44)			
				a)40歳代>60歳代 女性>男性		
死への恐怖・不安	男性 3.40 (1.56)	3.88 (1.57)	3.00 (1.27)	4.58 **	2.87	1.00
	女性 3.64 (1.33)	3.90 (1.36)	3.57 (1.36)			
	全体 3.56 (1.41)	3.89 (1.41)	3.39 (1.35)			
				a)50歳代>60歳代		
解放としての死	男性 2.60 (1.83)	2.78 (1.05)	2.95 (1.27)	2.59	4.19 *	0.14
	女性 2.88 (1.28)	3.06 (1.24)	3.37 (1.32)			
	全体 2.79 (1.47)	2.99 (1.19)	3.24 (1.32)			
				女性>男性		
死からの回避	男性 2.78 (1.49)	3.54 (1.31)	2.93 (1.14)	5.73 **	0.28	0.98
	女性 2.85 (1.31)	3.38 (1.17)	3.26 (1.18)			
	全体 2.83 (1.36)	3.42 (1.20)	3.15 (1.17)			
				a)50歳代>40歳代		
死への関心	男性 2.77 (1.26)	3.26 (1.11)	3.19 (1.08)	1.13	3.13	0.95
	女性 3.32 (1.43)	3.31 (1.25)	3.38 (1.16)			
	全体 3.14 (1.40)	3.30 (1.21)	3.32 (1.13)			
寿命観	男性 3.60 (2.08)	3.92 (1.81)	3.87 (1.70)	0.84	11.95 **	0.30
	女性 4.36 (1.58)	4.40 (1.70)	4.72 (1.55)			
	全体 4.12 (1.78)	4.28 (1.74)	4.45 (1.64)			
				女性>男性		

注: F値の下段のa)は多重比較の結果を示す。 **p<.01, *p<.05

2) 年代別の時間的態度と死に対する意識の関連

1%水準で有意な相関が得られたものについてのみとりあげ、考

察する。

(1) 過去への時間的態度と死生観尺度との相関 (Table 3)

40歳代では過去への時間的態度である「必然感」・「自己形成感」と「死後の世界観」・「寿命観」の間に中程度の正の相関がみられた。木下(1992)の研究において、40歳代に死を考えたとした者には死後の世界の存在を信じる傾向があることが示されている。本研究における死生観の年代別の比較においても40歳代は「死後の世界観」の得点が高かった。40歳代では人生の終わりとしてではなく、死後の世界があると人生の延長線上にとらえることは、40歳代のある種の死の受容の仕方であることも推測される。それが過去に対して自己を形成してきたものや、過去の出来事が現在の自分に必然であったと実感する過去の受け入れに関連したことは、40歳代においては過去の受容が死を認識し、受容する上で必要な要因であることが推測される。また、「後悔」、「とらわれ」に対しては、「死への関心」の間に中程度の正の相関がみられている。過去に対する後悔の思いやネガティブな出来事に対するとらわれた思いがある者は、死への関心が強いことが示唆された。40歳代は、中年期の移行期であり、生きてきた時間よりも残された時間が少なくなっていくことを初めて実感する時期である。その時期を通過するには過去への振り返りとともに過去の受け入れが必要となることが示唆される。

50歳代の特徴としては過去への時間的態度の「区切り」と「死への恐怖・不安」の間に負の相関がみられ、「後悔」・「とらわれ」と「死への恐怖・不安」、「後悔」と「死からの回避」の間に中程度の正の相関が得られたことがあげられる。50歳代においては過去に対して区切りをつける態度と、それに相対する過去の出来事に対する後悔やとらわれの態度が、死への恐怖や不安に対しても反対の相関がみられたことは興味深い結果である。死を受容することにより、過去への固執が低減され、新たなとらえ直しが行われることが推測できる結果であるともいえる。50歳代には死を現実的なものとして受け入れることで、過去へのこだわりよりも、限りある残りの人生に対する自身の未来に対する生の意識への転換が生じる可能性が示唆される。

60歳代では過去への時間的態度の「評価」と「死からの回避」の間に負の相関がみられ、「区切り」と「解放としての死」・「死からの回避」、「今によって変わる」と「死からの回避」、「後悔」と「死への関心」の間に正の相関がみられた。過去に対してがんばって生きてきたと評価することと、死について考えることを回避することなく受け入れることとの関連が示され、自己の有限性の受け入れにより過去への意識が生じていることも推測される。また、過去の出来事に対して過ぎたこととして一旦区切りを入れることや今によって変わるというような過去に固執することのない態度と死への回避が関連し、逆に過去に対して後悔を抱く態度は死について関心を向ける傾向にあることが示された。60歳代は定年退職を迎えたり、家庭での役割が変化する時期である。そのため、その移行期への適応は重要な発達課題であり、それに対する状況変化に適応ができるか否かが精神的健康に関連することが先行研究でも示されている(西田・堀井・筒井・平, 2006; 岡本・山本, 1985)。死を現実的に受け入れることで過去を評価し、評価した上で過去に区切りを入れ、残りの時間を新たなライフステージとして死にこだわることなく志向する姿勢が必要となる時期であることが推測される。

Table 3 過去への時間的態度と死生観尺度の相関

	年代	死後の世界観	死への恐怖・不安	解放としての死	死からの回避	死への関心	寿命観	
過去への時間的態度	基礎	40歳代	.211 *	-.044	.008	-.137	.088	.237 *
		50歳代	.038	-.126	-.162	-.109	-.024	.014
		60歳代	.065	-.106	-.093	-.038	-.059	.116
	必然感	40歳代	.393 **	-.088	.130	-.089	.170	.371 **
		50歳代	.233 *	-.139	-.016	-.110	.053	.215 *
		60歳代	.295 **	.037	.012	.081	.051	.153
	自己形成感	40歳代	.343 **	-.060	.106	-.174	.198	.285 **
		50歳代	.090	-.045	.042	-.087	.031	.081
		60歳代	.088	-.158	-.117	-.050	.031	.065
評価	40歳代	-.005	-.192	-.040	-.199	-.086	-.055	
	50歳代	.105	-.102	-.030	.016	-.018	.056	
	60歳代	-.042	-.220 *	-.111	-.225 **	-.123	.119	
区切り	40歳代	.105	-.052	.222 *	-.109	-.013	.124	
	50歳代	-.189	-.249 **	-.205 *	-.233 *	-.099	-.046	
	60歳代	-.016	.177 *	.284 **	.233 **	.021	.017	
経験からの学び	40歳代	.098	.033	.008	-.136	.121	.028	
	50歳代	.125	.004	.024	-.054	.096	.115	
	60歳代	-.022	-.035	-.087	.112	-.100	-.098	
とらえ直し	40歳代	.186	-.086	.120	-.090	.183	.125	
	50歳代	.116	-.045	.115	.073	.130	.116	
	60歳代	.011	.041	-.108	.056	-.033	-.029	
後悔	40歳代	.091	.179	.121	.154	.301 **	.173	
	50歳代	.167	.469 **	.103	.364 **	.183	.092	
	60歳代	.020	.201 *	.126	.178 *	.228 **	-.041	
とらわれ	40歳代	.187	.167	.091	.147	.419 **	.151	
	50歳代	.127	.456 **	.224 *	.294 **	.227 *	.045	
	60歳代	-.016	.166	.188 *	.174 *	.149	-.093	
今によって変わる	40歳代	-.010	.103	-.064	.093	.001	.040	
	50歳代	.015	.022	.118	.130	.066	.006	
	60歳代	.172 *	.182 *	-.069	.277 **	.054	.021	

** $p < .01$, * $p < .05$

(2) 現在への時間的態度と死生観尺度との相関 (Table 4)

40歳代では、現在への時間的態度の「自己理解希求」と「解放としての死」・「寿命観」、「必然感」と「死後の世界観」のみに正の相関が得られた。解放としての死の質問項目は「私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている」、「死は痛みと苦しみからの解放である」というような、現在の苦しみからの解放を示す内容である。寿命観についても死の受容としてのポジティブな意味と、寿命はあらかじめ決まっているとしてあきらめるネガティブな受容を意図して回答している者がいることも推測される。今後、この点については再度検討する必要があるが、40歳代において自己理解が得られていない場合は、現在に満足が得られておらず、生に対する意欲を低くするものであることがうかがえる。それに対して、現在の出来事に対して必然感を感じ、現在にコミットしている態度は、過去への時間的態度と同様に死後の世界を信じることと関連し、未来に対する生への意識が生じていることが示唆された。

50歳代では現在への時間的態度の「過去作り」と「死後の世界観」・「死への恐怖・不安」・「寿命観」、「閉塞感」と「死への関心」、「自分のために」と「解放としての死」・「死からの回避」の間に正の相関がみられた。年代別の死生観尺度の傾向から、50歳代は死に対する恐怖・不安の意識や、死に対する回避の意識が高まることと示され、50歳代では自分が死ぬ存在であることをより意識する時期であると示唆される。そのため、死への恐怖とともに、死後の世界を信じることや、運命として死を受け入れることと、現在の行動を人生の終点からみつめる過去作りという意識が関連したと考えられ

る。また、自分のために現在の時間を使うという意識が生じている者は、残りの時間という意識をより強く感じていることが推測され、その時間の終わりを解放としてとらえたり、死をあえて意識しない回避という態度が生じ、関連したと推測される。現在に対して閉塞感を感じている態度も、死への関心も高いことが示された。50歳代に死に対する恐怖や不安が高まることが示唆されている (Table 2) ことから、現在に充実感が得られない場合には死に対するネガティブな意識が喚起されることが示唆される。

60歳代では、「自己理解希求」と「解放としての死」、「空虚感」と「死への恐怖・不安」・「解放としての死」・「死からの回避」、「過去作り」と「解放としての死」の間に正の相関がみられた。60歳代においては、40歳代や50歳代よりも物理的に死をより身近に感じていることが推測され、自己理解が得られていなかったり、人生に空虚感を感じている場合は、残りの人生に対する希望よりも近づく死に対する恐怖心が高まることと推測される。それに対して、「経験の蓄積感」と「解放としての死」には負の相関がみられている。死の恐怖に苛まれたり、死ぬことを人生からの解放としないためには、現在に人生の蓄積感を実感することが重要であり、現在に対する生への取り組みを行うことがより必要となる時期であると考えられる。

Table 4 現在への時間的態度と死生観尺度との相関

	年代	死後の世界観	死への恐怖・不安	解放としての死	死からの回避	死への関心	寿命観	
現在への時間的態度	自己理解希求	40歳代	.232 *	.129	.300 **	.110	.231 *	.358 **
		50歳代	.106	.105	.152	.064	.000	.065
		60歳代	.106	.155	.267 **	.172 *	.141	.061
	自己理解気づき	40歳代	.210 *	.047	-.091	-.057	.062	.023
		50歳代	.108	.052	.047	.002	-.027	.107
		60歳代	.103	-.135	-.169	-.089	-.048	.066
	自己理解確信	40歳代	-.034	-.067	-.103	-.066	-.131	-.230 *
		50歳代	-.008	-.093	.024	-.200 *	.148	.045
		60歳代	.010	-.197 *	-.177 *	-.147	.081	.004
充実感	40歳代	.005	-.082	-.137	-.127	-.186	-.054	
	50歳代	-.019	-.051	-.011	-.139	.097	.001	
	60歳代	.142	-.115	-.192 *	-.022	-.088	.200 *	
経験の蓄積感	40歳代	-.026	-.110	-.087	-.244 *	-.003	-.096	
	50歳代	.011	-.030	-.039	.018	-.037	-.008	
	60歳代	-.040	-.030	-.247 **	.011	-.062	-.011	
到達感	40歳代	.138	.063	.158	-.012	.167	.044	
	50歳代	-.009	-.130	.125	-.098	.014	.045	
	60歳代	-.033	.115	.154	.086	.092	.016	
必然感	40歳代	.281 **	-.046	.132	.048	.140	.202 *	
	50歳代	.084	-.045	-.079	.130	.093	.015	
	60歳代	.129	.086	.086	.143	-.018	.040	
未来に向けて	40歳代	.235 *	-.011	.167	.028	.049	.244 *	
	50歳代	.100	-.056	-.071	.027	.020	.110	
	60歳代	.126	-.043	-.114	.135	-.182 *	.151	
過去作り	40歳代	.119	.134	.119	.224 *	.205 *	.129	
	50歳代	.265 **	.257 **	.090	.147	.097	.267 **	
	60歳代	-.013	.094	.302 **	.130	.115	-.191 *	
空虚感	40歳代	.147	-.019	.082	.033	.100	.143	
	50歳代	.161	.054	.120	.066	.071	.185	
	60歳代	.077	.269 **	.346 **	.328 **	.071	-.009	
閉塞感	40歳代	-.074	.122	-.049	.104	-.016	.035	
	50歳代	-.037	.056	.067	-.032	.253 **	.052	
	60歳代	.089	-.060	.064	-.114	.038	.084	
自分のために	40歳代	.169	-.060	.036	-.010	.055	.091	
	50歳代	.129	.187	.288 **	.340 **	-.007	.076	
	60歳代	.029	.086	-.021	.130	-.028	.006	

** $p < .01$, * $p < .05$

(3) 未来への時間的態度と死生観尺度との相関 (Table 5)

40歳代では未来への時間的態度の「期待」と「死からの回避」に負の相関がみられ、「不安」と「死への恐怖・不安」・「解放としての死」・「死への関心」に正の相関が見られた。未来に期待を抱いてい

る者は、死を回避しておらず、それに反して、未来に不安を抱いている者は死を否定的にとらえていることが推測される結果となった。木下 (1992) は 40 歳から 50 歳までの男女を対象に死に対する態度と死への準備行動との関連を検討し、40 歳代には死を意識し、いろいろな点からそれをとらえようとするけれども、準備を具体的にするほどではないことを報告している。40 歳代にはまだ半分の人生が残されており、死に対して現実感を抱きにくい、生きてきた人生よりも残された時間が少なくなることから、漠然とした不安感が生じることも推測される、そのようなアンビバレントな葛藤が生じやすい年代であることがうかがえる結果である。

50 歳代においては、未来への時間的態度の「割り切り」と「死からの回避」に負の相関がみられ、「消化」と「解放としての死」に中程度の正の相関がみられた。40 歳代に比べて未来に対して心配してもしようがないというある程度の割り切りを示すことと死を回避せずに受け入れることが関連したことは興味深い結果であり、未来に対する志向性の変化を示すものであると考えられる。40 歳代において生じる残りの人生と未来への志向性のアンビバレントな葛藤が 50 歳代では割り切りという形で、折り合いをつけるプロセスが生じていることが推測される。また、残りの人生を消化と考えている者には死を解放としてとらえ、人生に対するあきらめを示唆する状況も読み取れる。

60 歳代では、未来への時間的態度の「自分磨き」と「解放としての死」に負の相関がみられ、「不安」「消化」と「死への恐怖・不安」・「解放としての死」・「死からの回避」・「死への関心」の間に正の相関がみられた。未来に対して自分磨きを目標として自己の内面への志向性が未来に対する生の意識を生じさせていることが示唆される。しかしその一方で、60 歳代では死の不安が直接的に未来の不安や残りの人生を消化ととらえるような希望の喪失と関連することが示された。若本 (2007) は、ポスト中年期 (66~75 歳) には、老いが

自らの寿命や死とつながってとらえられることを示しており、老いに対する意識にのみに関心が向いた場合には、それが死と結びつき未来への不安を生じさせることが推測される。50 歳代においても残りの人生を消化として位置付けることと、死を解放としてとらえることに正の相関がみられており、50 歳代以降には、前半の人生とは異なる自己の内面の成長などの目標の視点の変化が必要となる時期であることが示唆され、また、それが死への受け入れを促進するものとなることも推測される。

3) まとめ

時間的態度と死に対する意識との関連を年代別に検討したところ、40 歳代では死後の世界を信じたり、寿命として死を受け入れる姿勢が高まることを示唆され、そのような意識と過去に対する自己の形成感や必然感が関連した。また、未来に対する不安は死への恐怖や関心に関連を示した。原田 (2009) は、中年期のこころの悩みとして、中年期の出口には、虚飾のない自分と向き合い、死という完結に向かう日々が続くと述べる。そのような出口に向かうための助走として 40 歳代には、まず自己の死を位置付け、過去を振り返り、自己形成の過程として受け入れることが必要となる時期であることが示唆された。

50 歳代では過去の固執と死への恐怖・不安、死からの回避が関連を示し、50 歳代において死の受容は、過去の出来事に対する後悔やとらわれから解放する重要な要因となることが示唆された。また、過去や未来に対する割り切りには、死と向き合うことが関連し、50 歳代では死の受け入れが中年期の時間的展望の形成に影響を与えることが推測された。

60 歳代では現在や未来に対するネガティブな態度が死に対するネガティブな態度と関連した。Levinson (1978 南 博訳, 1992) は老年期には社会とのかかわり、および自分自身とのかかわりに新しい形のバランスを見つけること、人生に意義と価値を見出すことで、死の訪れを受け止めることができ、精神的な意味で和解をする述べている。老年期の前段階である 60 歳代に死と向き合うことで、今までの人生に折り合いをつけながら、自分磨きなどの新たなライフステージの意識をもって現在や未来に対して深いコミットすることが可能となると考えられる。

文献

安藤清志・松井 豊・福岡欣治 (2004). 近親者との死別による心理的反応—予備的検討 東洋大学社会学部紀要, **41**, 63-83.
 Colarusso, C. A. (1998). A development line of time sense : in late adulthood and throughout the life cycle . *The psychoanalytic study of the Child*, **53**, 113-139.
 Colarusso, C. A. (1999). The development of time sense in middle adulthood. *Psychoanalytic Quarterly*, **68**, 52-83.
 原田雅典 (2009). 中年期のこころの悩み・健康 (こころの悩みに強くなる) — (ライフサイクルとこころの悩み・健康) こころの科学, **144**, 64-69.
 橋本 浩 (2006). ポケット図解 発達心理学がよ〜くわかる本 秀和システム
 日淵淳子・岡本祐子 (2008). 中年期の時間的展望と精神的健康と

Table 5 未来への時間的態度と死生観尺度の相関

	年代	死後の世界観	死への恐怖・不安	解放としての死	死からの回避	死への関心	寿命観
期待	40歳代	.097	-.254 *	-.128	-.314 **	-.106	-.050
	50歳代	-.092	-.094	.078	.029	.001	-.038
	60歳代	-.054	-.078	-.076	-.058	-.031	-.038
チャレンジ	40歳代	.089	.123	-.078	.019	.044	-.055
	50歳代	.034	-.034	.052	.163	.024	-.031
	60歳代	.146	-.064	-.131	.010	.093	.100
未来自分磨き	40歳代	.230 *	.062	.020	-.049	.128	.178
	50歳代	.022	.180	.052	.102	.056	-.099
	60歳代	.123	-.024	-.234 **	-.031	.079	.075
現在の現状維持	40歳代	-.094	.068	-.054	-.032	-.043	.057
	50歳代	.143	-.044	.147	-.133	.157	.212 *
	60歳代	-.040	.056	.035	.127	.088	.135
時間的割り切り	40歳代	-.042	-.197	-.001	-.095	-.137	-.069
	50歳代	.036	-.181	-.216 *	-.277 **	.072	-.007
	60歳代	.044	.022	.064	.017	-.049	.096
個人的自分のために	40歳代	.153	.070	.102	.143	-.059	.162
	50歳代	-.071	.050	-.057	-.048	.078	.014
	60歳代	-.027	-.073	.098	-.057	-.092	.006
態度の死の準備	40歳代	.072	.037	-.118	-.032	.252 *	.056
	50歳代	-.108	-.068	.209 *	-.020	.243 *	.142
	60歳代	.216 *	.001	-.097	-.027	.168	.108
不安	40歳代	.108	.271 **	.284 **	.235 *	.386 **	.211 *
	50歳代	.176	.172	.226 *	.095	.090	.128
	60歳代	.046	.424 **	.329 **	.316 **	.251 **	-.035
消化	40歳代	.091	.127	.189	.148	.096	.210 *
	50歳代	.019	-.030	.485 **	.050	.102	.052
	60歳代	-.012	.318 **	.237 **	.268 **	.259 **	-.103

**p < .01, *p < .05

- の関連：40歳代，50歳代，60歳代の年代別による検討 発達心理学研究, **19**, 144-156.
- 平井 啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫 (2000). 死生観に関する研究 死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証. 死の臨床, **23**, 71-76.
- Karp, D. A. (1988). A decade of reminders : Changing age consciousness between fifty and sixty years old. *The Gerontologist*, **28**, 727-738.
- Kastenbaum, R. (1987). Past versus future orientation in psychotherapy for the elderly. *Psychotherapy in Private Practice*, **5**, 115-121.
- 木下稔子 (1992). 未来の出来事の予測と行動調整—中年期の人々の死に対する態度 光華女子大学研究紀要, **30**, 59-81.
- Kubler-Ross, E. (1969). *On Death and Dying* (キューブラー・ロス, E. 鈴木晶 訳 1998 死ぬ瞬間—死とその過程について—完全新訳改訂版 読売新聞東京本社)
- Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life*. New York : Alfred A. Knopf. (レヴンソン, D. J. 南 博 (訳) (1992) ライフサイクルの心理学 上 講談社学術文庫)
- 松浪克文・熊崎 務 (2001). 現代の中年像 精神療法, **27**, 108-117.
- Neugarten, B. L. (1968). *The awareness of middle age*. In B. L. Neugarten (Ed.) *Middle age and aging*. University of Chicago Press. pp. 93-98
- 西田厚子・堀井とよみ・筒井裕子・平 英美 (2006). 自治体定年退職者の退職後の生活と健康の関連に関する実証研究 人間看護学研究, **4**, 75-86.
- 岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, **33**, 295-306.
- 岡本祐子・山本多喜司 (1985). 定年退職期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, **33**, 185-194.
- 白井利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 田中愛子・後藤政幸・岩本 晋・李 恵英・杉 洋子・金山正子・奥田昌之・國次一郎・芳原達也 (2001). 青年期および壮年期の「死に関する意識」の比較研究 山口医学, **50**, 697-704.
- 丹下智香子 (2004). 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, **15**, 65-76.
- 都筑 学 (2007). 第1章 時間的展望の理論と課題 都筑 学・白井利明 (編), 時間的展望研究ガイドブック (pp. 11-28). ナカニシヤ出版
- 若本純子 (2007). 中高年期発達のメカニズム：老いに伴う発達過程 白梅学園短期大学教育・福祉研究センター研究年報, **12**, 59-70.